
僕は知っている

章一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は知っている

【Nコード】

N2877H

【作者名】

章一

【あらすじ】

自分を信じれずになってしまった青年が事故にあっけず、内なる自分が魂の叫びをする。

僕は知っている。君は決して弱い人間じゃないことを。僕は知っている。君は思いやりのある優しい人間だということを。君の目はいつも希望に溢れ、前向きで何か力強い意思が伝わってくるような光を放っていた。

君は学生時代、陸上選手だった。才能のある方ではなかったが努力を積み重ねる事のできる人間だった。同じ年頃の学生がアルバイトで小金を稼ぎ楽しく遊んでいる姿を見ても君は誘惑に負けなかった。また、才能のある選手がたいした努力もせずに君よりも優秀な成績をだした時も君はあきらめたりひがんだりしなかった。そして君はついに学生最後の年全国大会にまで出場し決勝まで進むことができた。君を始めから見えてきた人間からすれば奇跡のようことだったかもしれない。

陸上生活の途中成績がいつこうに伸びず笑われたこともあった。けなされたこともあった。それでも君の心は折れなかった。

そんな君が僕は大好きだ。だからこつちを向いてくれ。僕から離れないでくれ。僕は君を誇りに思っている。これからもずっと一緒にいてくれよ。

彼は立ち止り振り向いた。

「先生。意識が回復しました」

「なに。本当か」

病院のベッドで治療を受けているのは三十歳くらいの青年だった。仕事で疲れが溜まっていたことやミスが続いたことが原因でノイロ―ゼになりフラフラと道を歩いている所を車にひかれたのだった。瀕死の状態が続き長い間、意識も無かった。

「先生、容体はどうでしょう」

まだ安心と言える状態では無かった。しかし医者は言った。

「もう大丈夫だ。心配はいらんよ」
青年の目は希望に溢れ、前向きで生きるといふ力強い意志の光を放
っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2877h/>

僕は知っている

2010年12月13日22時20分発行